

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 志波彩子
著『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』

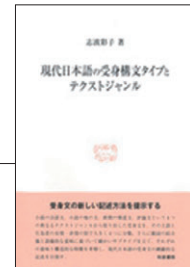
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 志波, 彩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000790

志波彩子 著

『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』

研究叢書 454

2015年2月 和泉書院 A5判 439ページ 10,000円+税



志波 彩子

1. この本の出版経緯

本著は、2009年に東京外国語大学に提出した博士論文『現代日本語の受身文の体系一意味・構造的なタイプの記述から』の一部に加筆し、修正を加えたものである。特に、奥田(1980-81)の議論について、Goldberg(1995)を中心とする構文文法論と比較しながら解説し、「構文」という概念に必須である「(統一的)体系、構造、要素」について考察し、記述の理論的枠組みとした。

2. この本の構成

序(目的と方法)、第1章 体系、構造、要素、第2章 有情主語有情行為者受身構文、第3章 有情主語非情行為者受身構文、第4章 非情主語一項受身構文、第5章 非情主語非情行為者受身構文、第6章 テキスト別受身構文タイプの分布、結(今後の課題)

3. この本の内容

本著は、現代日本語の受身文を体系的に、網羅的に記述することを目的としている。4種類のテキスト(小説の会話文、小説の地の文、報道文、評論文)から収集した受身文を動詞の結合価と語彙的な意味に基づいて構文としてくまなくタイプ分けし、その意味・構造的な特徴を記述した。また、それぞれの構文タイプがいかなる構造的な条件の下で他の構文タイプに近づき、移行するののかという相互関係のあり方(ネットワーク)についても議論している。さらに、4種類の各テキストにおいて、受身構文タイプの現れ方がどのように異なるか、その割合を示しながら分析した。

受身構文については、構成要素の意味から全体の意味をとらえることのできる、透明性の高い構文から、「多くの国に共通点が見られる」(非情主語一項受身構文の存在確認型)のように透明性が低く、構文が独自の意味(ここでは「存在」)を主張しているものまで、50以上の細かいサブタイプを立てた。このように、いわば語彙・構文論的に受身構文を分析し、記述することで、特殊な受身構文と通常の受身構文との相互関係をとらえることができる。また、4つのテキストジャンルと受身構文タイプの現れ方との関係もより詳細に考察することができると思われる。

例えば、「この国は海に囲まれている」「川に挟まれた村」のように、主語も行為者も非情

物で位置関係を表す受身構文があるが、この構文は、もともとは状態変化を表す動詞が、「白布に包まれた棺」「竹の棒に挟まれたビラ」のような先行する変化がほとんど想定されない、状態性の高い構文で用いられることで定着したものと考えられる。また、二格が現象名詞（「霧に包まれた城」）になると、「朝陽に照らされた町」のような現象受身構文へ移行する。一方、主語と行為者が有情者であると、接近的な態度を表す構文（「記者に囲まれる」）だが、これも主語と行為者が組織や団体であると、位置関係の構文に近づく（「ソ連は資本主義国に囲まれていた」）。このように、構造を構成する要素の特性が変わることで、他の構文タイプへ近づき、移行するという関係を考察している。

テキストジャンルとの関係では、小説の会話文テキストにおいて高い割合を示した受身構文は、動詞「言われる」に代表される相手への発話を表す有情主語有情行為者受身構文と、対人関係における感情＝評価的な態度を表す「いじめられる、笑われる、なめられる」などの動詞を要素とする構文、感情＝評価的な態度を表す手段となっている接触動詞（叩かれる、抱かれる等）による構文であった。小説の地の文では、他のテキストではほとんど現れない、存在状態を表す構文タイプ（「窓辺に花が飾られている」等）と現象受身構文（「木々が風に吹かれてゆれている」等）が特徴的に現れる。有情者の心理的状态を表す有情主語非情行為者受身構文（「育児に追われる」等）が非常に高い頻度で現れるのも特徴的である。また、位置変化動詞による非情主語一項受身構文の割合も高く、ここにも他のテキストには見られない特徴的な受身構文（「視線が眉間に据えられる」等）が観察される。新聞の報道文テキストには、特定の時間と場所において行事が催行されること表す構文（「2日、本社で会議が開かれる」等）が圧倒的な頻度で現れる。また、「～と見られる」という推定的判断を表す構文及び「作用 N-ガ求められる／予想される／注目される」といった社会的関心を表す構文が特徴的に用いられる。評論文テキストでは、先に挙げた存在確認型が高い割合で現れる。その他、論理的関係を表す受身構文や形容詞相当の構文（「4つに区切られた部屋」「加工された食品」等）などが他のテキストに比べて多く現れるのも特徴的である。

●参考文献●

- Goldberg, Adele. E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press. (河上誓作他訳 (2001) 『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』 研究社出版)
- 奥田靖雄 (1980-81) 「言語の体系性」『教育国語』 63, 64, 65, 66号 (再録: 『ことばの研究・序説』 むぎ書房, 1996)

志波 彩子 (しば・あやこ)

名古屋大学大学院・国際言語文化研究科准教授。博士(学術)(東京外国語大学)。東京外国語大学非常勤講師、東京外国語大学グローバル COE 研究員、国立国語研究所時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員を経て、2015年4月より現職。

主な著書・論文: 「ト見ラレル」の推定性をめぐる一ラシイ、ヨウダ、(シ) ソウダ、ダロウとの比較も含めー」(『日本語文法』 13(2), 2013), 「2つの受身—被動者主役化と脱他動化—」(『日本語文法』 5(2), 2005)。